

6月号

おまけ

第242号 96.6.17
71年10月25日 創刊
東大生協「ほん」
編集委員会
東大生協事務局内
TEL(3811)5481

大学へ自由化Vの時代へ
高度教育社会の到来
鷺田小彌太著
青弓社 二〇〇〇円

大学は変わります
鷺田小彌太(編著)・橋爪大三郎(評)
青弓社 二〇〇〇円

なお「大学は変わります」には鷺田氏や橋爪氏の論以外に、大学教授が女性にとつて魅力的な職業であることを強調する井上治子氏の「女性に最適職業としての大学教授」や、東大理系研究室における人権無視等を院生が告発した「大学は変わりません」などが所収されており、こちらも一読の価値がある。(杏)

◎橋爪大三郎 1996

1996-21 ビートルズが現役だった頃

JOHN、PAULら四人組と聞けば、西欧世界の人びとならきつと聖書を思い出す。JOHNはヨハネ、PAULは聖パウロのことだからだ。そう言えば福音書も、四篇あるではないか。

一人でも二人でもなくて、四人組。するとその中心に、なんとなくイエスの姿が視えてくる。宗教的なアウラが立ちのぼってくる。のちにジョン・レノンが、「自分たちはイエスより有名になった」と言った言わないで物議をかもしたのも、ファンの側に何となくそんな同一視が隠れていたことの露われかもしれない。

* 中学生になって、ラジオのヒットチャートを聴くようになった。毎晩のように「今週のベストテン」みたいな番組があり、ガーガーピーピーの雑音をかき分けてダイヤルを回し地方

ISSN 0388-7162

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』
1996.2.10発行 pp.174 朝日新聞 おまけ



橋爪大三郎
『言語ゲームと社会学論』
勁草書房・1985年

われわれを取り巻く世界は「言語ゲーム」の巨大な渦巻のようなものとして存在している。世界の中心をなすはずの主体の形象もその中でのみ生み出される。したがって主体が言語を掌握するのではない。むしろ逆に言語こそが主体を掌握するのだ。本書はヴィト

ゲンシュタインの「言語ゲーム」の発想に依拠しつつ、さらにはハートやルーマンの法理論を援用することで、法や権力といった社会的現象の言語的成り立ちを明らかにする。いわゆる「言語論的転回」の成果をいち早く取り入れたものとして必読の一冊である。

第二に、リズムが変である。出だしの「シー・ラヴズ・ユー」と「イエーイエーイエー」の関係がなかなか呑み込みにくい。その前の「ドコンドコン」というドラムとのタイミングも微妙である。そんな間の取りにくいポップスはそれまでなかった。

第三に、和音(コード進行)も変である。「シー・ラヴズ・ユー」に続く一回目の「イエーイエーイエー」と、二回目、三回目の「イエーイエーイエー」がみなコードが違う。それはまだいいとして、最後のおまけの「イエー」はどう聴いても不協和音である。C↓G↓F↓……といった、判で押したようなコード進行を無視して進んでいく自由が、そこには感じられた。

* こんなこともあった。

私の入っていたクラブ(地質部)が、長瀨に合宿した。宿舎の旅館にジュークボックスが置いてあった。ビートルズはないかと探してみると、橋幸夫や美空ひばりにまじって、「ブリーズ・ブリーズ・ミー」があるではないか。一曲五〇円と高かった(ヤキソバ三〇円の時代には大金である)けれども、大枚一〇〇円をはたいて二回聴き、友人がもう一回聴いた。ジュークボックスのサウンドの迫力は、ラジオなんかとくらべものにならない。ジョン・レノンのハスキーな「カモン、カモン」のリピートと、ポール・マッカートニーのベースギターの軽快な動きが、私のなかの野性的ななにかを自覚めさせた。

局まで梯子をすれば、たっぷり新曲情報をチェックできた。カーペンターズではないが、他愛もない「シヤラララ……」や「シンガリンガリン……」に一喜一憂というやつである。プレスリーもまだ現役でヒットを飛ばしており、リトル・ペギー・マーチスの学園ポップスだの一発ヒットだのがチャートで浮き沈みを繰り返していた。

そんななか、ビートルズが登場した。日本のチャートはおおむねアメリカと連動していたから、はじめ反応は鈍かったが、そのうち火がついた。私が最初に意識したのは、「シー・ラヴズ・ユー」である。夏休みに浜辺で寝ころがっていたら、監視所の有線スピーカーから同じ曲ばかり流れてくる。それも、一回や二回でなく、一日中かけ通しだ。誰か、ビートルズ・マニアの仕業に違いない。翌日も、翌々日も鳴りやまず、おかげで耳にこびりついてしまった。

ビートルズはたしかにロックンロールだが、五〇年代以来のワンパターンのものとは違う。それは、聴いたことのない音楽だった。

まず、リード・ヴォーカルなしのコーラスで、誰が唱っているのかわからない。メロデーラインははつきり聴こえるのだが、それだけコピーしたのではビートルズにならない。それまでもコーラス・グループならあったが、ロックンロールとは関係なかった。ビル・ヘイリーとコメッツでも、バディ・ホリーとクリケッツでもない、ただのビートルズ。「グループ」が主役に躍り出たのだ。

当時ステレオはまだめずらしく、ハイファイセットが家にあればいいほうだった。もちろんラジカセも、カセット・テープもまだ売っていない。私は、英語の勉強と称して、オープンリールの安いテープレコーダーを買ってもらい、ラジオのスピーカーと線でつないでエアチェックを試みた。音質はひどいものだった。まともな音源に触れようと思えば、ジュエークボックスは手っ取り早かった。

ビートルズが実際に演奏しているところを観たのは、「エド・サリヴァン・ショー」のビデオ（日本で放映された）だった。ビートルズのLPを友達から借りて、オープンリールに録音し、毎日繰り返し聴いた。私の英語の発音は、ビートルズで勉強したようなものだ。ビートルズが武道館で来日公演した日は、運よく抽選に当たり、高校を休んで聴きにいったのが何人かいた。つぎの日に様子を聞けば、彼らが舞台上に登場するなり、皆がワーキヤーと騒いで、ほとんど何も聴こえなかったという。それならテレビで観ていて正解だった、というように自分を納得させた。大学に入って最初に買ったLPは、『サージェント・ペパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』だった。これは一カ月の間、毎日のように繰り返し聴いた。見違えるようなビートルズの世界がそこにあった。それからレコードをすべて買い集め、解散までつきあった。

ビートルズと同時代を、私は歩いている。どこかにいつも、そんな意識があった。サイケデリック・サウンドも、フラワー・ムーヴメントも、ヒッピー・スタイルも、ビートルズの

変化と同時進行だった。若者の髪は長くなり、人びとはGパンをはきははじめ、奇抜なファッションも、シンガー・ソングライターも当たり前になった。モノラル録音から始まった、ビートルズも、ステレオ、エイト・トラック……と、技術進歩とともに急速にステレオアップし、生演奏では再現できないアルバムしか作らなくなった。解散は必然だった。体力勝負、単純明快なロックンロールの時代は終わり、巨大なPAをバックにがり立てるロックの時代が始まった。

*

六〇年代、ビートルズが聴かれていた当時、ビートルズが理解されていたとは言いがたい。さびれた大都市・リバプールの悪ガキどもが、アメリカの黒人音楽を習いおぼえてバンドを作った。音楽で芽が出なかったとしたら、ろくでもない一生を送ったに違いない。イギリス社会の厳しい階層差、ロックンロールに対する反感をはねのけて、少女たちがまずビートルズに熱狂したのだ。

そんなマイナス・イメージは、日本人には伝わらない。当時日本は、邦楽／洋楽の二大ジャンルが支配していた。邦楽は、国内を音源とする歌謡曲や民謡のたぐいであり、そこにちらほら、和製ポップスも混じっていた。洋楽は、海外を音源とする、クラシック、ジャズ、ポップスのたぐいであった。洋楽ファンと邦楽ファンは、違ったカテゴリーの人びとで、たとえば典型的な山の手の中流家庭は、歌謡曲など絶対に聴かなかった。洋楽に分類されてい

たジャズやロックンロール（洋盤）は、相対的に高級だったのであり、労働者階級の下積みルサンチマンといった心情が聴き取られることはなかった。

六〇年代から七〇年代の前半まで、そのまま放映できるビデオ映像などないに等しかったから、音楽番組は日本でリメイクするしかない（たとえば、日本テレビの「シャボン玉ホリデー」やフジテレビの「ザ・ヒットパレード」）。カヴァーを専門に唱うポップス歌手、というジャンルが存在した。しかし洋楽ファンは、彼らを無視してオリジナルを崇拜する。海の内この音楽は、理解できないけれども、いや、理解できないからこそ、理屈ぬきに憧れの対象だった。

そんな時代にピリオドを打ったのが、ビートルズである。

ビートルズは、カヴァーでできなかった。レノン・マッカートニーの類いまれな音楽性の豊かさ、オリジナルな演奏の放つアウラが、コピーを寄せつけなかった。彼らは、自分たちで唱いたい曲を作り、自分たちのスタイルで演奏する。馬鹿な若者にはこの程度のものを聴かせておけばいいという、五〇年代ポップスにありがちな大人の驕りや商業主義とは無縁なものを、人びとは感じとった。ビートルズはポップスを、アート（創造的活動）にした。コピーがでなければ、自分たちがクリエイトイヴになるしかない。彼らのもと、ロックンロールはロックになった。日本では、GS（グループ・サウンド）邦楽サイドから仕かけられた、歌謡曲のセンスとビートルズの編成との混合物）がつかの間のブームとなったあと、シンガ

ー・ソングライターの時代が始まった。洋楽／邦楽の対立が溶解し、単一の消費文化がわが国を覆っていくのである。

*

ビートルズは六〇年代、世界を同時に巻き込んだ現象だったが、同じ時期に、スチュアート・パワーも起こっている。中国の紅衛兵、日本の新左翼、欧米の学生叛乱が、相前後して世界を揺り動かした。

学生叛乱の動機や背景は国ごとに異なるが、共通する要因を認めることができる。それは、米ソ冷戦体制に対する異議申立てである。

毛沢東が文化大革命という、前例のない大衆闘争を指示したのは、中ソ対立の結果だった。ロシア革命以来、国際共産主義運動の指令部だったソ連は、中国の革命を「指導」しようとした。中国にしてみれば、干渉である。面白くない。ナショナリズムに目覚めた中国は、それを正当化するために、ソ連に「修正主義」のレッテルを貼った。そして、毛沢東思想の権威と政治的正統性を確立するために、国内からソ連や西側の影響を一掃しようとはかったのが、文化大革命である。米ソが対立するのが世界ではない。本当の対立は、米ソ・対・中国である。それまでの世界観をひっくり返すために、若者を動員して、既存の社会制度を破壊する必要があった。

日本の新左翼の場合もそうである。冷戦前の建て前からいえば、ソ連や日本の共産党が

んばって、世界革命を実現しなければならぬ。しかし、いっこうにその気配がない。これは、彼らがスターリン主義に変質して、革命を放棄したからである。だからこそ新しい前衛党に結集し、帝国主義・スターリン主義の双方を打倒しなければならぬ。——若者が新左翼や、その変形である全共闘に結集したのは、冷戦世界の構造そのものに異を唱えるためだった。

アメリカの学生叛乱は、ベトナム戦争がきっかけになった。アメリカ政府はベトナム戦争を、冷戦の枠組みで解釈しようとした。しかし戦争の実態は、「自由のための戦い」とはほど遠いものだった。アメリカの若者は、世界の警察官としての役割に駆り出される必要があるのか。冷戦に代わる新しい世界イメージ、ライフ・スタイルを提案することが、当時のアメリカの若者の課題となった。

フランス、ドイツの学生叛乱は、時代に合わなくなったヨーロッパの古い学制がきっかけだった。大学生の大衆化が進み、昔のようにエリートとして扱われると期待できなくなった。本人たちも、エリートとしての行動様式を捨て、消費社会のなかの大衆だと自己認識している。彼らにはたとえば、ビートルズの心情がびびりたりだ。そんな大学生にしてみれば、大学の古い建て前など嘘くさい。そういうギャップが、欧米や日本の学生運動には共通していた。冷戦などくそ喰らえ、なのである。

*

大学闘争の嵐が日本中を吹き荒れていたころのこと。ある日私が、東大の駒場キャンパスを通りかかると、誰かが貼り出したポスターが目についた。てっぺんのところから、YES/NOで枝分かれを順にたどっていくと、最後は、全共闘と民青（日本共産党系の青年組織）のあいだのどこかに落ち着くようになっていく。なるほどと思ったのは、最初の質問が「ビートルズが好きですか」で、YESだと全共闘、NOだと民青の方向に一步進むようになっていくこと。このポスターはよくできていてと話題になり、週刊誌にも紹介された。

たしかにビートルズ以後、二〇歳前後の人びとは、自己主張のスタイルを獲得した。六〇年安保のデモのとき、大学生はあらかじめ詰め襟の学生服を着ていた。七〇年には誰も着ていない。驚くべき変化である。長髪もたちまち当たり前になった。若者が若者特有の服装をするようになった。のちにマーケティング戦略のターゲットとなるべき、年代ごとの分化したライフ・スタイルは、この時代から明確となったのである。

ビートルズはなぜ、ここまでの世界性を持ったのだろうか？
ただし、世界性と言っても、その影響は主として先進諸国にとどまる。たとえば中国では、改革開放まで（というところは、八〇年代になるまで）ビートルズの影響など皆無だった。ビートルズはおろか、西側の音楽が禁止同然で、ほとんど聴くことができなかったからである。開放後は、香港・台湾のポップスや、パンク、テクノ・ポップ、マドンナ、マイケル・ジャクソン、ビートルズ……と、ほとんどなんでも一緒くたに紹介されて、混乱をきわめている。

西暦2001年の「幸福」を考える100人

PHP研究所創設50周年記念企画

Voice 10月特別増刊号

日本の論壇500人

Who's Who

橋爪大三郎 (はしづめ だいさぶろう)

●東京工業大学教授
一九四八年神奈川県生まれ。東京大学大学院人文科学研究科社会学専攻博士課程修了。
八五年に著した「言語ゲームと社会理論（勁草書房）でデビュー。以来、「言語派社会学」の立場から、社会システムや政治制度がいかに「言葉の用法」と密接不可分に生成されるか、あるいは「言葉を超えた」別種の

話を戻せば、ビートルズの登場は、フランスならシャンソン、イタリアならカンツォーネ日本には歌謡曲……といった、流行音楽の国民文化に幕を引くことになった。ビートルズは録音技術の革新とともにその世界を拡げ、映画・TV・ビデオといった映像を駆使した最初のグループとなった。アルバムの観念も、大規模なコンサート・ツアーも、メディア・ミックスの戦略も、彼らとともに始まったと言っている。ロックと英語と音響機器の組み合わせが世界標準となるにつれ、各国の感性は均一化され、それ以外のジャンルのものが世界市場で成功する可能性はますます小さくなった。

*

ジョン・レノンの不慮の死により、ビートルズは、誰も壊すことのできない伝説として永遠に残ることになった。いま思えばビートルズは、若い世代の人びとが自己主張の権利を手に入れるために、必要な権威だったのかもしれない。

ビートルズの来日から三〇年。ビートルズ世代も親となり、そろそろ孫も生まれる時代となった。ビートルズはひとつの地平を開いたが、その後S.M.A.P.にいたるまで、本質的な変化はひとつも起きていないように思われる。ビートルズが立ち向かったのとは違った種類の閉塞が、再び世界をどぎしている。この閉塞を打ち砕く、つぎの才能の登場を早く目にしたいものだ。

(はしづめ だいさぶろう)

一九四八年、神奈川県生まれ。東工大教授。社会学専攻。著書に『はじめての構造主義』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『民主主義は最高の政治制度である』など。

現実たる宗教が持つ「言葉の内側にある」ことなどを、現実問題に即して解き明かしてきた。日本語で社会学を行うのも、「日本社会の作動メカニズムは、日本語の与える現実から独立でない」とする認識から。現代思想の移植に汲々とする。思想の貧血症、状況に抗し、日本独自の言葉の用法、「暗黙の前提」の解明に挑む。「思想とは、言語の個人責任の制度である」と語るだけに、いま最も了解可能な社会学者だ。
著書に「橋爪大三郎の社会学講義」(夏目書房、95年)など。